山崎延吉と愛知用水

はじめに

昭和 23（1948）年 5 月、農聖といわれた山崎延吉は、自宅に訪ねてきた久野庄太郎から初めて愛知用水の構想を聞かされ、「私は多年愛知県の農業につくしてきたが用水を作って農民を救うことは考えて見なかった」「私も余生を傾けて援助する」と激励した。その後山崎はその言葉どおり、亡くなるまで愛知用水の実現に向けて力を尽くした。これは愛知用水が夢のような話から実現へと向かう黎明期のことで、山崎は自身の人望と人脈を駆使し、久野の描いた愛知用水の構想を、戦後日本の国土総合開発のモデルへと向かわせた。

同年 8 月、久野を含む知多農村同志会は、知多郡の農民を多数連れて愛知用水取水口に予定した木曽川の八百津を見学している。山崎は現地で講演し「農民自身が団結して用水を作れ」と絶叫したという（『愛知用水史』p. 131）。ここでは山崎が愛知用水実現にむけて「余生を傾けて援助」した姿を、山崎自身が社長を務めた東海毎日新聞と残された日記から見出してみよう。

山崎延吉と久野庄太郎

山崎延吉は、明治 6（1873）年石川県金沢生まれ、東京帝国大学農科大学を卒業後の明治 34（1901）年に愛知県立農林学校（現在の安城農林高等学校）初代校長に就任するため愛知県に来た。教育者であり農政家であった山崎は「我農生〈がのうせい〉」と名のり、安城を拠点として全国的に活躍する。安城一帯が「日本デンマーク」と呼ばれる農業先進地になったのは山崎によるところが大きい。山崎は著書『昭和の義農』（集文館、1942 年）で、久野庄太郎を「全身農民魂」と紹介して高く評価していた。

久野は山崎を頼りにして愛知用水の進捗状況を報告するために、度々山崎邸を訪ね、手紙も頻繁に出している。それに応えて山崎は、久野に紹介状を書いて支援者を広げ、現地視察もおこない、関係者の選挙運動にも協力した。これらは山崎の日記(安城市歴史博物館所蔵)から確認することができる。

山崎は戦後、昭和 21（1946）年の創刊から昭和 27（1952）年の廃刊まで「農業と宗教唯一の新聞」として発刊した日刊紙・東海毎日新聞の社長を務めていた。

高松宮の愛知用水計画地視察

昭和 25（1950）年 7 月 12 日から 16 日まで 4 泊 5 日で実施された高松宮の愛知用水計画地視察は、地元の人びとはもちろん、自治体や国を皇室の権威によって説得するという大きな狙いがあった。昭和 22（1947）年 12 月 29 日の東海毎日新聞 1 面に「お庭は畑　高松の宮さま　山崎本社長と暮れのお語らい」と題する高松宮邸に出向いた山崎についての記事がある。山崎が以前から高松宮と懇意だったからこそ、高松宮の視察が実現したと思われる。

山崎の日記を辿ると、高松宮視察の前年、昭和 24（1949）年 12 月 4 日午後に高松宮に愛知用水の視察を願う手紙を書いている。高松宮からの返信は昭和 25 年 4 月 2 日にあった。日記には「高松宮殿下の愛知用水視察は、6 月以後との通知ありたり」と記されている。

6 月 12 日には「久野・石川来訪。殿下の御日程を伝へて、準備をなさしむ」とある。このとき久野とともに行動していた石川氏とは、電力需給の国家統制をおこなっていた日本発送電の東海支店長・石川栄次郎である。7 月 2 日には東海毎日新聞に「高松宮さま 愛知用水関係地を御視察」として、日程と見学コースが掲載された。7 月 5 日には「寝込を久野表はれ、六時半起き、殿下御案内の打合をなし、飯後退去」とある。視察の日が近づき、時間を惜しんで準備する姿が見えてくる。7 月 9 日には瀬戸に高松宮が泊まれるような宿がないとの報告があり、瀬戸市と協議するよう話す。視察前日 7 月 11 日には「明日より殿下に随行する用意をなす」。この日、瀬戸では陶芸家・加藤作助邸への宿泊が決まったことの報告を受けている。山崎が視察プランの詳細に関わったことがうかがえる。

7 月 12 日「高松宮殿下に愛知用水の御視察を願ふこととし、今日より十六日、御案内することとす。一時汽車にて出発、久野等と特急にて来名の殿下を迎ふ。宮田用水、木津用水取入口を見て、八百津は曽水館に御案内す。十時、吉嶋と同泊。殿下の随行は吉嶋事務官一名。久野と自分は始終案内役を勤む」。この日、名古屋駅で高松宮を出迎えた山崎の写真が、翌 13 日の東海毎日新聞に掲載された【写真①】。

東海毎日新聞

高松宮殿下名古屋駅御着 向つて左は出迎えの山崎本社長

高松宮さま

愛知用水を御視察

水利事業に急所つく御質問

写真①　昭和 25（1950）年 7 月 13 日東海毎日新聞

また 14 日には高松宮と記者との対談というかたちで、「小利害をこえた利益をもたらす計画だから誰でも喜ぶべきはずのものだろう」「大きな食糧増産になると思う」「狭くて水の多い日本で生活の基となる水のない都会がいまの中部地方にあるというのがオカシイ、これでは文化都市とはいえまい」「いまの日本にとつてどれだけプラスになるか判らぬ」「工事は大きな意義がある」「早く着工し完成を期すべきだ」との高松宮の発言を引き出し、掲載した【写真②】。

東海毎日

高松宮さま 本社記者対談

用水工事は生産的

早く完成することを御希望

写真② 昭和 25（1950）年 7 月 14 日東海毎日新聞

13 日以降も帰路に着く 16 日までの詳細が記されている。そこには愛知用水の現地視察として「師崎に出て、水の不自由を御覧になり、内海町役場にて協力者と昼飯を共にとる」という場面もある。瀬戸では陶芸家・加藤作助邸に泊まり、彼の作品を献上、常滑では伊奈製陶（現 INAX）の伊奈長三郎邸での晩餐会、長久手古戦場や徳川美術館の見学など、高松宮の視察を飽きさせる

ことのないよう努めている。16 日、15 時 50 分の特急で高松宮は帰京。山崎は 16 時の汽車で帰宅して疲れて寝た。山崎の繊細な配慮によって実現した高松宮の愛知用水予定地視察は、その後の愛知用水運動進展の大きな力となった。

知多農村同志会と愛知用水

山崎の下に集まった知多農村同志会も、山崎の賛同する愛知用水実現を積極的に支援した。昭和 23（1948）年 8 月 7 日、武豊町の堀田稲荷神社で開催された知多農村同志会で、久野が愛知用水の構想を同志会会員に説明し促進を要請すると、全員一致でその実現のために運動することが決定される。

「祈願祭の記念撮影」というキャプションがついた写真（『愛知用水史』p. 131）はこのとき撮られたものとされてきた。それとは別に、2004 年、浜島辰雄から愛知用水土地改良区に託された１枚の写真がある【写真③】。その場でアルバムから剥がしたため、左下が破けているが、先の「祈願祭の記念撮影」と同じ写真で、写真の上に「七十七 丑年 我農生」と記されており、我農生と自身を称していた山崎の喜寿の記念写真と思われる。

写真③　昭和 24（1949）年 3 月 7 日
知多農村同志会による山崎延吉喜寿祝賀会

山崎の日記を調べてみると、この写真は昭和 24（1949）年 3 月 7 日に撮られたものだということがわかる。この日 8 時半に熱田から武豊に向かい、知多農村同志会同窓開催の喜寿祝賀会に出席。30 余名が集まり、土産に米をもらい 18 時に帰宅。「熱田駅にて霙〈みぞれ〉降て、午後武豊にて雪を見る」とあり、寒い日だった。もし件の写真が「祈願祭の記念撮影」であれば 8 月のことで、そのときの記念撮影写真ではないことになる。

ではなぜこの写真は「祈願祭の記念撮影」として使われたのだろうか。愛知用水土地改良区所蔵の『愛知用水史』の執筆原稿を確認すると、この写真の上部の文字部分をカットして掲載するようとの指示がある。つまりこれは写真掲載の単純なミスではなく、『愛知用水史』執筆段階でこの写真を知多農村同志会の祈願祭の記念写真として使うことにしたのである。武豊町の堀田稲荷神社で久野が愛知用水の構想を話し、知多農村同志会の全員で一致団結した昭和 23（1948）年 8 月 7 日にも山崎は立ち会っていた。だからこそ山崎の喜寿祝賀会の写真を使ったのである。こんなことからも、いかに山崎が愛知用水を支援していたかがわかるのである。

愛知用水実現を夢見て

山崎の愛知用水を支援する思いは、亡くなる間際まで書き続けられた日記にも記されている。昭和 29（1954）年 5 月 27 日には久野が来て、愛知用水が「愈々本格的になれるを喜合った」。2 日後の 5 月 29 日に日本政府は愛知用水建設のため世界銀行に対し外貨導入を申請。6 月 13 日には愛知用水土地改良区理事長・伊藤佐が東京から来て「愛知用水について語り先づ軌道に上れるを喜合った」。6 月 15 日には久野が来て「愛知用（水）の話をなし、喜合った」。6 月 19 日には愛知用水から浜島（辰雄）が来て「蛍光燈を贈られ感謝」と記している。頻繁に愛知用水の関係者が顔を出しているのは、山崎を見舞ってのことだっただろう。山崎の日記は 6 月 21 日で終わる。

久野から愛知用水の構想を聞き、「余生を傾けて援助する」と語った山崎は、その言葉通り愛知用水の実現に向けて亡くなる間際まで尽力し続け、7 月 13 日息を引き取った。

（公財）愛知・豊川用水振興協会研究員　　逵　志保

本稿は『愛知用水土地改良区創立七十周年記念誌』（愛知用水土地改良区編・発行、2022 年）に発表したものを修正し、新たに資料を加えた。